

県中教研 社会部会だより

第 41 号

発行日 令和8年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 尾畑 真紀
題 字 金山 泰仁 先生

「一人一人の子供を主語」にした授業づくり

指導主事 龍瀧 治宏

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)では、学習指導要領に基づき、「一人一人の子供を主語」にした教育が求められている。この考え自体は、従前から大切にされてきたものであるが、教育を「教師視点」から「学習者視点」で捉え直すことを強く打ち出しており、各学校においては、主体性を引き出す「伴走者」として、生徒の実態に応じた様々な取組が行われている。

本年度、「一人一人の子供を主語」にした授業づくりに向けて、研究大会の全ての授業で、研究主題にある「課題を追究したり解決したりする活動」を工夫した授業実践が行われた。公民的分野「経済のしくみと消費」の授業では、消費活動についてICTを活用したシミュレーションの体験やロールプレイ形式の発表を通して、生徒が家計管理について助言し合っていた。生徒は必要感をもって授業に参加し、一人一人がお金に対する「希少性」の見方・考え方を働かせながら本時の学びを深めていた。地理的分野「東北地方」の授業では、生徒一人一人が学習形態や学習方法を選択しながら学びを調整したり、思考ツールを用いて、考えを共有・比較したりすることで、地理的な見方・考え方を働かせながら、地域的特色や課題を明らかにしていた。これらの授業に共通していたのは、授業者が単元を通して身に付けさせたい資質・能力を明確にしていたことである。また、生徒一人一人が課題解決に向けて、「見方・考え方」を働かせたり、ICT活用や資料読解等の情報活用能力を生かしたりして、自分自身で学びを進める姿が見られたことも挙げられる。

「一人一人の子供を主語」にした授業づくりには、こうした生徒の学びの姿を日常の授業の中で実現していくよう伴走者としての準備が大切である。また、生徒の好奇心を満たす学びを保障して、主体性と意欲を引き出し、学ぶ意義を感じられるようにすることも必要である。これまでの研究成果を共有しながら、こうした実践が今後も数多く生まれていくことを期待したい。

(西部教育事務所)

生徒と共に「問い」を楽しむ

部長 尾畑 真紀

今年度は、改訂した「研究の構想(令和7年度~)」の下で研究を進める初年度でした。同時に見直しを図った「令和7年度の研究計画」の副題は、『課題を追究したり解決したりする活動』の工夫」としています。この副題は、文部科学省初等中等教育局視学官の藤野敦先生が、昨年度の講演で触れてくださった内容を受け、本部会で大切にすべきキーワードとして位置付けられています。講演では、生徒が「課題を追究したり解決したりする活動」を通して学ぶために、どのような学習の過程をつくり、どのような学習課題(問い)を提示することが大切なのかを、私たちに投げかけてくださいました。

「社会的な見方・考え方を働かせる『問い』」が授業改善の柱となることを認識してはいるものの、試行錯誤の日々は続きます。研究授業等の指導案検討の折にも、話題に上がるのが「学習課題(問い)」です。使用する語句や文末の表現、課題提示のタイミング、前段階で用いる資料の内容や提示方法等、考える視点はたくさんあります。私たちは、まだ知られていない、経験したことがないものに出会ったり、これまでの認識と新たに得た情報や事実との「ズレ」を感じたりしたときに、「問い」をもちます。「本当なのか」「なぜなのか」「どのようにしたらよいのか」等、芽生えたその疑問こそが、本物の理解につながる必要感のある「問い」になると考えます。学習活動は、課題解決という目的のためにあります。生徒の思考の流れを予想しながら授業を組み立てることはもちろんですが、授業者自身が生徒と共に考えてみたい(解決したい)「問い」を見いだせたとき、課題解決に向けて必要となる学習展開や学習形態、資料や発問等の手立てが次々と思いつく経験があるのではないのでしょうか。そのような授業を増やせるように、本部会の研究を通して互いに学び合いながら、「問い」の質を高めていきたいものです。

(富・呉羽中)

第 69 回 研 究

新 川 地 区

(下・朝日中)

(1) 研究授業

岩崎将展教諭が、3年公民的分野「基本的人権の尊重」の単元において、「死



刑制度は存続すべきか、廃止すべきか」の学習課題を設定して授業を行った。授業では、教師がファシリテーターとなり、生徒から出た意見を板書で整理し、議論が大きく逸れないように修正しながらねらいに迫った。生徒は27枚の資料から根拠を探し、死刑制度の「存続」「廃止」に関して多面的に考察し、議論を行っていた。議論の中で、「公共の福祉」「法は国民のためにある」「制度を変えることができるのも国民から選ばれた代表者」「えん罪は一度でもあってはならない」等の人権や法に関わるキーワードが飛び交い、生徒が既習事項を主体的に活用する場面も多くみられた。

(2) 部会協議

部会協議①では、日水徹指導主事（東部教育事務所）から、深い学びの実現のために必要な視点について指導助言をいただいた。現代社会で議論されている事象について生徒自身が判断する活動を通して、生徒がその事象を成り立たせている考え方や概念を理解し、生きて働く知識を獲得していくことが大切であると助言をいただいた。

部会協議②では、文部科学省初等中等教育局視学官である藤野敦先生から、「単元設計」と「学習評価」についてご講演をいただいた。単元設計では、生徒と教師が課題に対して見通しをもち、同じゴールを共有することで授業内容の充実につながることで、問いを工夫することで生徒が自ら主体的に学習内容を考えるきっかけとなることを教えていただいた。

開沢 佳弘 (下・入善西中)

富 山 地 区

(富・城山中)

(1) 研究授業・部会協議①

四津谷洋平教諭が、3年公民的分野「民主政治と私たち」の単元において、「より多くの国民が政治に参加するには、どのようなことが大切なのだろう」という学習課題で授業を行った。生徒は、現行の選挙制度について考察するために、紙とインターネットを利用した模擬投票を通して、それぞれの長所や短所について話し合い、ワークシートとホワイトボードに書き出してまとめた。選挙の基本原則を確認しながら、どのようにしたら、より多くの人々が選挙や政治に関心をもつようになるかを考えた。また、学習形態を生徒自身が選択する機会が設定されており、主体的に学びに向かう姿が見られた。

齋藤理指導主事（東部教育事務所）からは、主体的な課題追究を促すための教材開発の工夫や、より効果的な課題追究を実現する授業構成の在り方について助言をいただいた。生徒が単元を通じた問いに対する仮説に基づいて調べる学習活動を取り入れたり、生徒の思考の中から新たな課題を見いだしたりすることの重要性についてご指導いただいた。



(2) 部会協議②

富山市立奥田中学校より「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実のために端末活用は有効であったか」と題して、ICTを活用した自由進度学習の実践について提案発表があった。学習計画の可視化やクラスルームの活用方法等、具体的な授業構成とともにICTスキルや学習進度の差等の今後の課題についても情報が共有された。

提案発表を通して、社会的事象を主体的に追究する生徒を育てるために、様々な授業方法に取り組んでいこうとする意欲を高める機会となった。



中村健太郎 (富・興南中)

大会報告

高岡地区

(高・五位中)

(1) 研究授業

松田陸教諭が、2年地理的分野「東北地方」の単元で、「東北地方における自然環境や交通網の整備は、人々の生活・文化や産業にどのような影響を与えているのだろうか」という課題で授業を行った。一人一人の生徒が、思考ツール「クラゲチャート」をクラウド上で編集し、互いに共有・比較して学びを深めた上で、単元を貫く問いに対するまとめを行った。

また、本単元の学習では、単元内自由進度学習を取り入れ、生徒自らが見通しをもって学習形態や学習方法を選択したり、進度や理解度



に応じて自らの学びを調整したりできるようにしたことで、単元の終末である本時においても、自らの学びを深めようと主体的に表現活動に取り組む生徒の姿が見られた。

(2) 部会協議

部会協議前半の研究協議では、「生徒が目的意識をもち、友達と考えを共有・比較することで新たな学びを見いだしており、日頃の単元内自由進度学習の成果が出ていた」「教師が綿密な学習計画表を準備し、生徒に見通しをもたせたことが主体的な活動につながった」等の意見があった。

渋谷圭祐主任生活指導主事（西部教育事務所）からは、「クラゲチャートは、生徒の考える力を育てるための『足場』になっており、単元を貫く問いに対するまとめを行う際に有効だったのではないかとご意見をいただいた。また、単元を貫く問いの主体を生徒にするための工夫について助言をいただいた。

後半は、「『課題を追究したり解決したりする活動』の工夫はどうあればよいか」というテーマで、研究主題の解明に向けて、日頃から工夫して取り組んでいることや悩んでいること等をグループで協議した。

本研究大会から学んだことを、今後の教育実践に生かしていきたい。

中山 隼人（氷・西條中）

砺波地区

(南・城端中)

(1) 研究授業

塚原平馬教諭が、3年公民的分野「経済のしくみと消費」の単元で、「家計アドバイザーになって、どのようなアドバイスをしたらよいのだろうか」という学習課題で授業を行った。本時では、生徒が家計管理アドバイザーとして、顧客の家計に関するアドバイスを班で考え、2つの班に対してロールプレイ方式で発表した。

J-FREC（金融経済教育推進機構）提供の教材を基に顧客の設定を行い、生徒は具体的にアドバイスを考えていた。また、意見交流を通じて、自分の考えを整理したり修正したりするとともに、授業のまとめにおいて、本時の課題や単元を貫く課題について多面的・多角的に考察していた。

(2) 部会協議

部会協議①では、「家計管理アドバイザーという設定により、真剣かつ客観的にアドバイスを考え、発表する姿が見られてよかった」という意見が出た。また、「導入で考える視点を示したり、希少性に触れた学習課題を設定したりすることで、本時のねらいにさらに迫っていくことができたのではないか」という意見も出た。



龍瀧治宏指導主事（西部教育事務所）からは、「単元を貫く課題の解決に向けて学習課題についてまとめたり、単元を貫く課題に対して毎時間振り返ったりすることで、それぞれが有機的に関連し構造的な単元となるよう設計されていた」「顧客設定を破綻状態にするなど、家計アドバイザーに相談しなければいけない設定にすれば、生徒は必要感をもって学習に取り組み、考えがより深まったのではないか」と助言をいただいた。

部会協議②では、「社会的な見方・考え方を働かせ、社会的事象を主体的に追究する生徒を育てるにはどのようにすればよいか～課題を追究したり解決したりする活動の工夫～」と題して、文部科学省初等中等教育局視学官である藤野敦先生から、塚原教諭の授業にも触れて、ご講演いただいた。

本研究大会から学んだことを、今後の教育実践に生かしていきたい。

市川 義浩（小・石動中）

富山市中教研社会部会・活動報告

富山市中教研社会部会では、6月に研究部会を開催した。分野別グループワーク1では、前半に「明日から使える授業のタネ」と題して情報共有を行った。後半は「課題を追究したり解決したりする活動」の工夫を中心に、①指導と評価の一体化、②課題の設定、③教材開発の工夫、④学習活動の工夫の4点について、各自が持参した資料を基に、4名程度の小グループで情報交換を行った。現在どのような授業を展開し、どのようなことを意識しているのかなど、様々な情報を得ることができたことに加え、小グループのメンバーを時間ごとに変えながら進めたことで、交流する場を多くもつことができ、有意義な研修となった。グループワーク2では、「みんなで授業をつくろう」と題して「課題を追究したり解決したりする活動」を中心に、単元計画や1時間の授業展開を考える活動を行った。分野ごとにいくつかの単元を取り上げて協議し、今後の授業づくりに生かせる活動であった。

8月に開催した研究部会では、①富山大空襲を伝承していくための講演会と、②研究大会の指導案検討を行った。①では、「改めて平和教育の意義とその実践の在り方について深く考えさせられた」といった感想が寄せられるなど、戦後80年という大きな節目にあたる今、戦争の記憶をどのように継承していくべきかを改めて考える、大変貴重な機会となった。②では、研究大会に向けて、公民的分野の学習指導案について小グループで協議した。生徒の興味を引く題材の検討や授業形態等、主体的・対話的で深い学びとなるように、授業展開について意見交換が行われた。

学校規模によっては校内で教科部会ができない部員もいるため、部会での意見交換は、協働的で深い学びとなり、授業実践に生かすことができる充実した研修会となった。

問谷 文悟 (富・山田中)

小矢部市・砺波市中教研社会部会・活動報告

小矢部市と砺波市では、毎年6月に合同で研究大会を実施している。今年度は、砺波市立庄川中学校の寺松優教諭が、1年地理的分野「人々の生活と環境」の単元で、「なぜ人々の生活が地域によって異なっているのかを説明しよう」という学習課題で授業を行った。

導入では、前時の学習を振り返り、景観写真から衣服と住居、自然との関連を通して、生徒が社会的な見方・考え方を働かせて読み取りながら、学習を進める工夫を取り入れていた。展開では、学習課題を主体的に追究するため、5つの探究方法や主題図「特色ある料理と食事」を提示した。生徒は前時の活動を振り返りながら、世界各地の食事と自然との関連について、様々な資料やタブレットを使い、友達と意見を共有しながら自分の考えをまとめていた。授業のまとめでは、生徒全員の意見をテキストマイニングして可視化するなど、ICTを有効に活用していた。



部会協議前半の研究協議では、若手・中堅・ベテランの会員を混ぜた3つのグループに分け、意見交換を行った。「主題説明や視点等で、効果的であった点や改善点」について、拡大した指導案に付箋を貼りながら話し合い、グループの代表者が発表し、全体で共有した。後半では、授業者からの疑問点を受けて、再度グループで授業での改善策を話し合い、「資料を衣服だけに絞った方がよかった」等の意見が出た。

部会協議後半の研究協議では、若手・中堅・ベテランの会員を混ぜた3つのグループに分け、意見交換を行った。「主題説明や視点等で、効果的であった点や改善点」について、拡大した指導案に付箋を貼りながら話し合い、グループの代表者が発表し、全体で共有した。後半では、授業者からの疑問点を受けて、再度グループで授業での改善策を話し合い、「資料を衣服だけに絞った方がよかった」等の意見が出た。

会員が実践に取り組み始め、課題をもつ年度当初の2市合同開催の研究大会を通じて、1つの授業を基に会員が学び合う貴重な機会となった。今後も、会員同士が各実践を基に、市や学校の枠を越えて交流し、学びを深めたいと考えている。

市川 義浩 (小・石動中)